

話し手の論理と聞き手の論理は日本語にどのように 反映されているのか

——英語との比較を通して——

海寶康臣

Abstract

This paper attempts to elucidate how a speaker's economy and an auditor's economy are reflected in Japanese on the basis of the Principle of Least Effort proposed by Zipf (1949). To begin with, I explain when connectives and sentence final particles are obligatory in a set of sentences where a cause-effect relation is established. These markers are assumed to be used to satisfy an auditor's economy. Next, I demonstrate that the construction in which an adjectival clause is postposed has a low acceptability status when the verb in the main clause is not a verb of appearance or existence, because it cannot have a form embodying an auditor's economy. Lastly, I maintain that a pair of sentences connected by the conjunctive expression *ga* and a complex sentence where the main clause is left unsaid reflect a speaker's economy.

Keywords : 話し手の論理, 聞き手の論理, 最小労力の原則, Cause-Effect relation, 主節の省略

はじめに

言語現象を観察すると、話し手の論理が反映されていると考えられる場合と聞き手の論理が反映されていると考えられる場合がある。日英語を対照した場合、話し手の論理と聞き手の論理が反映される言語現象が両言語で異なることがある。本稿の目的は、話し手の論理と聞き手の論理が、どのような日本語の言語現象においてどの程度反映されているのかを、英語との比較を通して明らかにすることである。本稿の構成は次の通りである。次の §1 では聞き手の論理を反映しなければならない言語表現について考察する。§1.1 では、英語との比較を通して先行研究が、聞き手の論理に従っているとみなしている日本語の言語現象の特色の一端を明らかにする。具体的には、接続表現や文末表現の省略可能性について考察する。§1.2 では、英語の主語名詞句からの外置とそれに対応する日本語表現とを比較し、後者の特徴を明らかにする。つづく §2 では、話し手の論理に従っていると考えられる言語表現について考察する。§2.1 では接続助詞の「が」によって結合されている文の連鎖の特徴を、§2.2 では従属節だけを述べて主節を省略した表現の特徴を明らかにする。

本稿で使用する「話し手の論理」と「聞き手の論理」という表現は、Zipf (1949) の「最小

労力の原則」に基づいている。Zipf は、この原則は人間のあらゆる行動を支配すると考えており、たとえば、目的地までの移動に際して我々が目的地まで最短のコースを選択するのは、我々がこの原則に支配されているためとしている。Zipf はこの原則は言語にも適用されるとし、(1) のように述べている。

- (1) [I]f there are an m number of different distinctive meanings to be verbalized, there will be (1) a *speaker's economy* in possessing a vocabulary of one word which will refer to all the m distinctive meanings; and there will also be (2) an opposing *auditor's economy* in possessing a vocabulary of m different words with *one* distinctive meaning for each word. (Zipf 1949:21)

児玉 (2004) は (1) の「最小労力の原則」を踏まえて、(2) の見解を提示している。

- (2) Grice (1975) は発話の生成解釈において会話の協調の原則と四つの公理を提案したが、その一つである量の公理は (1) 「必要なだけの情報を与えよ」と (2) 「必要以上の情報を与えるな」の二つに下位区分されている。これは一見矛盾した公理にみえるが、(1) が聞き手の論理であり、(2) が話し手の論理である。 (児玉 2004: 33)

Zipf の「最小労力の原則」は、話し手は提供する情報をできる限り少なくすませたいという話し手の論理と、聞き手は話し手にできる限り多くの情報を提供してもらいたいという聞き手の論理の存在を示唆している。先行研究には、日本語は英語と比べた場合、話し手の側からみてことばの使い方が儉約的であることを示唆する見解と、聞き手の解釈上の負担を軽減するために提供される情報量が多いという見解の両方がある。見解の相違は着目する言語現象の違いから生じており、何れか一方の見解が誤っているというわけではない。

日本語は話し手の側からみてことばの使い方が儉約的であるとする見解、つまり日本語は話し手の論理に従っていることを示唆する見解には、Hinds (1986, 1987), Miyake (2007), 滝沢・滝沢 (2009) などがある。

- (3) We might say that English speakers tend to overspecify verbal content whereas Japanese speakers tend to underspecify verbal content. (Hinds 1986: 26)
- (4) a. I take as a starting point the position that English speakers, by and large, charge the writer, or speaker, with the responsibility to make clear and well-organized statements. If there is a breakdown in communication, for instance, it is because the speaker / writer has not been clear enough, not because the listener / reader has not exerted enough effort in an attempt to understand.
- b. In Japan, it is the responsibility of the listener (or reader) to understand what it is that the speaker or author had intended to say.

(Hinds 1987)

話し手の論理と聞き手の論理は日本語にどのように反映されているのか（海寶）

- (5) The Japanese use what in America might be called “beating around the bush” to express their mind to others. Listeners are expected to catch the speaker’s intention from context or hints. (Miyake 2007: 41)
- (6) アメリカ人のコミュニケーションはコンテキスト（状況）に頼らず、言葉そのものに依存するが、日本人のコミュニケーションは逆にコンテキストに大きく依存する。
(滝沢・滝沢 2009: 70)

Hinds (1986) は、日本語に比べて英語の方が言語化の仕方が詳細であるという見解を提示しており、Hinds (1987) は、コミュニケーションの成否に対して、英語では話し手の責任の方が重く、日本語では聞き手の責任の方が重いという見解を提示している。話し手の責任が重い場合、話し手は聞き手が誤解しないように言葉を尽くすことになるので、聞き手の論理に従っているといえる。逆に聞き手の責任が重い場合、話し手が自分の考えや意図を十分に言語化しなくても、話し手は聞き手の方がそれを察することを期待できるので、話し手の論理に従っているといえる。Miyake (2007) と滝沢・滝沢 (2009) も Hinds (1987) 同様日本語は聞き手責任の重い言語であるとみなしている。滝沢・滝沢 (2009) は、日本語母語話者は状況から聞き手が自分の考えを察することを期待するのに対して、アメリカ人英語母語話者は言葉を一番のよりどころにして自分の考えを聞き手に伝達するという見解を提示している¹⁾。

他方、日本語は聞き手の論理に従っていることを支持する見解には、内田 (2002) と兎玉 (2006) がある。

- (7) a. 高次表意は日本語では明示される方が自然な文になることが多いが、英語では必ずしも明示する必要はない。
b. 高次表意とは具体的に言語化されている発話の上のレベルに設定される動詞句をいい、発話行為、命題態度 (propositional attitude) などを反映する。
(内田 2002)
- (8) 一般に英語は1語の有する語義が多く、話し手の意図や文間の関係を示す高次表意が欠如するのに対して、日本語は1語の語義が少なく、英語の高次表意が言語化される。これも英語が話し手の論理に従った言語であるのに対して、日本語が聞き手に配慮した言語であることによる。
(兎玉 2006: 80)

内田 (2002) と兎玉 (2006) によると、英語では言語化されない、文間の意味関係を表す表現や、発話行為を表す部分が日本語では言語化される。(9) を直訳した (10a) が不自然なのは、(10b) のように「から」という文間の意味関係を表す標識が欠如しているためであり、(11a) を直訳した b. (i) が不適格なのは、(ii) のように「言って」という発話行為を表す部分が言語化されていないためである。

- (9) If you have any questions about banking procedure, ask Jim. He knows the form.
(内田 2002)

- (10) a. ?銀行の手続きについてわからないことがあればジムに聞くとよい。彼は必要書類について知っている。
b. 銀行の手続きについてわからないことがあればジムに聞くとよい。彼は必要書類について知っているから。

(内田 2002)

- (11) a. Frankly, I can't help you.
b. (i) *率直に, 手伝えません。
(ii) 率直に言って, 手伝えません。

(児玉 2004: 33)

1. 聞き手の論理を反映しなければならない場合

1.1 接続表現と文末表現

内田 (2002) は「[(12)] の直訳, [(13)] はぶっきらぼうな文体を意図したものでなければ不自然な日本語である」と述べている。

- (12) a. Bill hit Mary. She left.
b. Tom ate the rotten meat. He fell ill.
c. The game was cancelled. The rain was heavy.

(内田 2002)

- (13) a. ?ビルがメアリーをなぐった。メアリーは出て行った。
b. ?トムは腐った肉を食べた。病気になった。
c. ?試合は中止になった。雨がひどかった。

(内田 2002)

- (14) a. ビルがメアリーをなぐった。それでメアリーは出て行った。
b. トムは腐った肉を食べた。そのために病気になった。
c. 試合は中止になった。雨がひどかったから。

(内田 2002)

つまり, (13a, b, c) は, (14a, b) の文間に生起している「それで」や「そのために」のような接続表現や, (14c) の第2文に生起している「から」のような文末表現が生起していないので不自然であるとみなされている。接続表現の有無による適格性の違いは (16) と (17) の適格性の違いにも示されている。(15a, b) は適格であるが, その直訳である (16a, b) は, 接続表現の「しかし」や「けど」が生起している (17a, b, c) に比べて適格性が落ちる²⁾。

- (15) a. The rain was heavy. The game wasn't cancelled.
b. The game wasn't cancelled. The rain was heavy.
(16) a. ??雨がひどかった。試合は中止にならなかった。

話し手の論理と聞き手の論理は日本語にどのように反映されているのか（海寶）

- b.??試合は中止にならなかった。雨がひどかった。
- (17) a. 雨がひどかった。しかし試合は中止にならなかった。
b. 雨がひどかったけど試合は中止にならなかった。
c. 試合は中止にならなかった, 雨がひどかったけど。

接続表現や文末表現の有無で適格性に違いが生じるこうした例から、日本語は英語に比べて、文間の意味関係が明示的に言語化されていなければならない傾向があるといえる。日本語に文間の意味関係が聞き手の論理に従った形で明示されなければならない傾向があるというのは、確かなことである。

だがここで考えたいことが二つある。一つは、筆者の直感では (13a, b) に比べて (13c) は適格性がさらに落ちるが、もしその直感が正しいとすると、その要因は何かということである。そしてもう一つは、(18a), (19), (20) の下線部のように接続表現が文間に生起していても適格性に問題がない場合と、接続表現がないと適格性が下がる場合の違いは何に起因するのかということである。

- (18) a. 山田は8時から昼まで歩きつづけた。足が棒のようになった。
b. 山田は8時から昼まで歩きつづけた。だから足が棒のようになった。
(牧野 1978: 138)
- (19) 太郎はボールを蹴った。ボールは校舎の窓に向って飛んでいった。(邑本 1998: 150)
- (20) 兄は実業家になるとか云って頻りに英語を勉強していた。元来女の様な性分で、ずるいから、仲がよくなかった。十日に一遍位の割で喧嘩をしていた。ある時将棋をさしたら卑怯な待駒をして、人が困ると嬉しそうに冷やかした。あんまり腹が立ったから、手に在った飛車を眉間へ擲きつけてやった。眉間が割れて少々血が出た。兄がおやじに言付けた。おやじがおれを勸当すると言い出した。³⁾
(夏目漱石『坊ちゃん』)

文間において接続表現の生起が義務的か否かを左右する要因は複雑かつ多様である。本稿では文間に Kehler (2002: 15-23, 2004) の提案する一貫性関係 (coherence relation) の一つである Cause-Effect relation が成立している場合について考察する⁴⁾。一貫性関係とは文間の意味的なつながりのことを示すが、Cause-Effect relation は、二つの命題間に語用論的前提が認められる場合に成立する関係である。つまり、二つの命題の意味的なつながりが、我々が常識的に前提にしている知識によって支えられている場合に成立する関係である。Kehlerはこの Cause-Effect relation をさらに、Result, Explanation, Violated expectation, Denial of preventer という一貫性関係に下位分類している。

- (21) a. Result: Infer P from the assertion of S_1 and Q from the assertion of S_2 , where normally $P \rightarrow Q$.
b. Explanation: Infer P from the assertion of S_1 and Q from the assertion of S_2 , where

normally $Q \rightarrow P$.

- c. Violated expectation: Infer P from the assertion of S_1 and Q from the assertion of S_2 , where normally $P \rightarrow \neg Q$.
- d. Denial of preventer: Infer P from the assertion of S_1 and Q from the assertion of S_2 , where normally $Q \rightarrow \neg P$.

Kehler は連続する二つの文の第一文の意味を P 、第二文の意味を Q と表記し、語用論的前提が $P \rightarrow Q$ という関係を成立させている場合を Result と、 $Q \rightarrow P$ という関係を成立させている場合を Explanation と呼んでいる。また、語用論的前提が $P \rightarrow \neg Q$ という関係を成立させている場合を Violated expectation と、 $Q \rightarrow \neg P$ という関係を成立させている場合を Denial of preventer と呼んでいる。Kehler (2002: 20-21) は、(22a-d) の第一文と第二文の間には、角括弧で示した関係が成立するとしている。

- (22) a. George is a politician, and therefore he's dishonest. [Result]
- b. George is dishonest because he's a politician. [Explanation]
- c. George is a politician, but he's honest. [Violated expectation]
- d. George is honest, even though he's a politician. [Denial of preventer]

本稿では、Cause-Effect relation が成立している日本語の文の連鎖において、どのような場合に接続表現が義務的なのか、という問いに対して、(23a, b, c) の何れかに該当する場合と回答する。

- (23) a. S_1 , S_2 という連鎖において、 S_1 と S_2 の間に Result が成立しており、 S_1 と S_2 の結びつきが弱いと判断される。
- b. S_1 , S_2 という連鎖において、 S_1 と S_2 の間に Violated expectation が成立している。
- c. S_1 , S_2 という連鎖において、 S_1 と S_2 の間に Denial of preventer が成立している。

(23a) に該当する場合、接続表現が生起していないと適格性が僅かに下がる。(18a) (19) はともに S_1 と S_2 の結びつきが強いと判断されるので (23a) には該当しない。そのように判断されるのは、 S_1 から S_2 が容易に予測可能なためである。同様に (20) の下線部の第一文と第二文、第二文と第三文も文間の結びつきが強いと判断されるので (23a) には該当しない。主人公の兄の性分や主人公と兄、主人公と父親の関係から兄の父への告げ口や父の勧当という発言が容易に予測可能なので文間の結びつきが強いと判断される。(24b) (25b) (26b) は類例である。

- (24) a. 山田は喧嘩で相手の耳にかみついた。だから山田は凶暴な奴に違いない。
- b. 山田は喧嘩で相手の耳にかみついた。山田は凶暴な奴に違いない。
- (25) a. 太郎は恵まれない子どもにボーナスを全額寄付した。だから太郎は心の優しい人間である。

話し手の論理と聞き手の論理は日本語にどのように反映されているのか（海寶）

- b. 太郎は恵まれない子どもにボーナスを全額寄付した。太郎は心の優しい人間である。
- (26) a. 太郎は郵便屋さんだ。だから毎日郵便物の配達をする。
b. 太郎は郵便屋さんだ。毎日郵便物の配達をする。

これらの例の場合、文間に接続表現を生起させると、若干冗漫な印象を与えるようになる。これに対して、S1 と S2 の間に Result が成立しており、S1 と S2 の結びつきが弱い (27) (28) の文間には接続表現が必要である。

- (27) a. ジョージは政治家だ。だからジョージは不正直だ。
b.?ジョージは政治家だ。ジョージは不正直だ。
- (28) a. 太郎は食べ物の好き嫌いが激しかった。だから太郎は病気がちだ。
b.?太郎は食べ物の好き嫌いが激しかった。太郎は病気がちだ。

少なくとも、接続表現が生起している文の連鎖の方が冗漫に感じられることはない。S1 と S2 の結びつきが弱い場合、(27b) (28b) が示すように、文間に接続表現が生起していないと、僅かではあるが適格性が下がる。(28) の二文の間には「食べ物の好き嫌が多いと病弱になる」という語用論的前提が認められるが、食べ物の好き嫌が多いからといって必ずしも病弱になるわけではないので文間の結びつきは弱いといえる。

他方、(23a) に該当する場合とは違い、(23b) に該当する場合は適格性が明らかに下がる。

- (29) a. 山田は自分の父親を殴った。でも山田は本当は心の優しい奴だ。
b. ??山田は自分の父親を殴った。山田は本当は心の優しい奴だ。
- (30) a. 一生懸命働いた。しかし仕事も家族もすべて失ってしまった。 (渡辺 1995)
b. ??一生懸命働いた。仕事も家族もすべて失ってしまった。
- (31) a. 私は身体が弱かった。だから成功できた。
(<http://golden777.seesaa.net/article/15328021.html> を参照)
b. ??私は身体が弱かった。(私は) 成功できた。

たとえば、(29b) の第一文と第二文は「父親を殴るような人物は心優しくはない」という語用論的前提によって結び付けられているが、接続表現の「でも」が生起していないと適格性が明らかに下がる。同様に、(30b) の二文は「一生懸命働けば成功する」という語用論的前提によって結び付けられているが、接続表現の「しかし」が不可欠である。また、(31b) では第一文と第二文の間に「身体が弱い人は成功しにくい」という語用論的前提が認められる。この例においても接続表現が生起していないと適格性が低くなる。なお (31a) は本田技研工業創業者の本田宗一郎の発言を基にした例であるが、順接の接続詞が生起することで適格になっている。

(23b) に該当する場合と同様に、(23c) に該当する場合も適格性が明らかに下がることは、(32c) (33c) が示している。

- (32) a. 山田は父親を尊敬していたけれども、殴った。
b. 山田は父親を殴った、尊敬していたけれども。
c. ??山田は父親を殴った。(山田は)父親を尊敬していた。
- (33) a. 何度も説明したのに、理解してもらえなかった。 (益岡・田窪 1992: 195)
b. 理解してもらえなかった、何度も説明したのに。
c. ??理解してもらえなかった。何度も説明した。

(32c) の命題間には「尊敬する親を殴ることはない」という語用論的前提が、(33c) の命題間には「繰り返し説明すれば分かってもらえる筈だ」という語用論的前提が認められる。(32a, b) と (32c), (33a, b) と (33c) の (不) 適格性は、「けれども」や「のに」のような接続表現の有無に左右されている。

次に Cause-Effect relation が成立している日本語の文の連鎖において、どのような場合に文末表現が義務的なのか、という疑問に回答したい。この疑問には (34) に該当する場合と回答する。

- (34) S1, S2 という連鎖において S1 と S2 の間に Explanation が成立している⁵⁾。

(35) の第一文と第二文は「我々は歯が痛ければ歯医者に行く」という語用論的前提によって結び付けられているが、「からだ」のような文末表現が生起していないと適格性が明らかに下がる。また、(36) の第1文と第2文は「凍った道は滑りやすい」という語用論的前提によって結び付けられている。この例においてもやはり「のだ」のような文末表現が生起していないと適格性が明らかに下がる。

- (35) a. 歯医者に行った。今朝歯が痛かったからだ。
b. ?歯医者に行った。今朝歯が痛かった。
- (36) a. 彼女はすべて転んだ。道が凍っていたのだ。
b. ?彼女はすべて転んだ。道が凍っていた。 (山本 2002: 133)

二文の関係が Explanation で第二文に文末表現が生起していない場合、二文の関係が Result で文間に接続表現が生起しておらず、かつ文間の結びつきが弱いと判断される例に比べて、さらに適格性が低くなると感じられる。逆にいえば、文間関係が Result の (13a, b) は、文間関係が Explanation の (13c) や (35b) (36b) ほどは適格性が低いとは感じられない。適格性の判断がなぜこのようになるのか、という疑問が生じるが、この疑問に対しては、「文の配置順序が認識の順序と一致しているため」と回答する。(37) の「写像一貫性の原則」を遵守しているか否かが、文の連鎖の適格性に関与しているのである。

- (37) われわれは外界における事象を時間的順序に従って認知する。この認知順序は語順にも投影される。 (児玉 1998: 63)

話し手の論理と聞き手の論理は日本語にどのように反映されているのか（海寶）

「写像一貫性の原則」を遵守しているか否かが文の連鎖の適格性を左右する可能性があることは、(38a) と (38b), (39a) と (39b) の適格性の違いからも明らかである。

- (38) a. おみくじを引いた。大吉だった。
b. *大吉だった。おみくじを引いた。
- (39) a. 太郎は眠りについた。空を飛んでいる夢をみた。
b. *太郎は空を飛んでいる夢をみた。眠りについた。 (児玉 2002: 147)

文間に Cause-Effect relation が成立していない場合、「写像一貫性の原則」に反する順序で文が配置されると、(38b) (39b) のように不適格になる。

1.2 連体節の後置

英語には (40a) の関係詞節を文末に移動したような形式をしている (40b) のような構文がある。

- (40) a. A woman who wore a yellow hat came into the room.
b. A woman came into the room who wore a yellow hat. (高見 1995: 133)

こうした主語からの外置が行われている構文（以下、外置構文と呼ぶ）は、(41a) の連体節が文末に移動したような形式をした (41b) のような後置文に対応している。

- (41) a. 黄色い帽子を被った女性が部屋に入って来た。
b. 女性が部屋に入って来た、黄色い帽子を被った。

外置構文、連体節が文末に移動したような形式をした後置文（以下、連体節の後置と呼ぶ）ともに、先行する節の主語が後続する節によって修飾されている。

接続表現や文末表現に関する内田（2002）および児玉（2006）の考察は、日本語では文間の意味関係が聞き手の論理に従った形で明示されなければならない傾向があることを示している。本節では、連体節の後置を英語の外置構文と対照することにより、節間の意味関係の明示化に関して、日本語は英語よりも義務性が強いことを示す、さらなる根拠を提示する。

(40b) や (42b) が示すように、外置構文の主節の述部は通常「存在」や「出現」の意味を表す語が生起する⁶⁾。

- (42) a. A big mouse that was raised on beer is in this box.
b. A big mouse is in this box that was raised on beer. (Rochemont & Culicover 1990: 60)
- (43) a. A man who was wearing a T-shirt hit Mary.
b. *A man hit Mary who was wearing a T-shirt.

(中島 1995)

不適格な (43b) では、主節の述部に hit という「存在」や「出現」の意味を表さない語が生起している。海寶 (2005) では、外置構文は主節の述部が存在もしくは出現の意味を表さない場合でも、主節と外置節の間に Kehler (2002, 2004) の Cause-Effect relation が成立している場合は適格とみなされるという見解を提示した。この見解では、(44b) が適格なのは主節と外置節の間に Explanation が成立するためと説明される。

- (44) a. A man who had hostility toward her hit Mary.
b. A man hit Mary who had hostility toward her.

(中島 1995)

(44b) の主節の表す意味を P, 外置節の表す意味を Q とした場合、主節と外置節の間には $Q \rightarrow P$ という関係が成立する。この関係の成立は「ある人物が敵意を抱いたならば、その人物は敵意を抱いた相手を殴りたいと思うかもしれない」という語用論的前提によって支えられている。

(44b) の外置構文が適格であるのに対して、対応する (45b) は適格性が低い。

- (45) a. メアリーに敵意を抱いていた男はメアリーを殴った。
b. ?男はメアリーを殴った, メアリーに敵意を抱いていた。
c. 男はメアリーを殴った, メアリーに敵意を抱いていたので。

日本語の場合、文間の意味関係を示す標識が生起していない連体節のままでは適格性を維持することができない。(45b) を適格にするには、(45c) のように「ので」という文間の意味関係を表す文末表現を付加しなければならない。

連体節の後置では、主節と後置された連体節の間に Cause-Effect relation が成立していても適格性が低くなることは、(46b) (47b) から伺える。

- (46) a. A man gave Mary a bunch of flowers who wanted to get married to her.

(中島 1995)

- b. ?男はメアリーに花束をあげた, メアリーと結婚したいと思った。
c. 男はメアリーに花束をあげた, メアリーと結婚したいと思ったから。

- (47) a. Some guests drank milk who had never drunk it.

(中島 1995)

- b. ?一部の客は牛乳を飲んだ, 今まで一度も (牛乳を) 飲んだことがない。
c. 一部の客は牛乳を飲んだ, 今まで一度も (牛乳を) 飲んだことがないにもかかわらず。

(46) の主節と外置節 (連体節) の間には (44) (45) と同様に Explanation が成立している。この関係の成立を支えている語用論的前提は「結婚したいと思う人に贈り物を送ることがある」

というものである。(46a)は文間の意味関係を表す標識が生起していなくても適格であるのに対して、(46b)は適格性が低い。(46b)を適格にするには(46c)のように「から」等の文末表現を生起させなければならない。また、(47)の主節と外置節（連体節）の間には Denial of preventer が成立している。この関係の成立は「今までに一度も飲んだことがない飲み物は、口にするのを躊躇するものだ」という語用論的前提によって支えられている。(47a, b)はともに文間の意味関係を表す標識が生起していないが、両者で適格性に差がみられる。(47b)を適格にするにはやはり(47c)のように「にもかかわらず」等のマーカーを生起させる必要がある。英語の外置構文と日本語の連体節の後置との対照からも、日本語では英語以上に文間の意味関係を示す標識の存在が言語表現の適格性を左右するといえる。

2. 話し手の論理を反映している言語表現

2.1 接続助詞「が」の使用

§1.1では接続表現が聞き手に文間の意味関係を示す機能を果たし、聞き手の解釈上の負担を軽減させる例みた。しかしながら、すべての接続表現が聞き手の解釈上の負担を軽減する役割を十分に果たすことが可能なわけではない。たとえば(48) - (53)が示すように、接続助詞「が」によって結合可能な文の連鎖は多様であるので、この接続助詞から二文の意味的なつながりを聞き手に絞り込ませることは困難である。

(48) 彼は大いに勉強したが、落第した。 (清水 1959: 54)

(49) 彼は大いに勉強したが、合格した。 (清水 1959: 54)

(50) 10日午後3時25分ごろ、京都市右京区西院の府道で、速度違反取締中の右京署の男性巡査(28)が、速度超過のバイクを停止させようとしてはねられた。バイクはそのまま逃走。巡査は病院に運ばれたが、鎖骨を折るなどの重傷を負った。

(産経ニュース 2010年4月10日 21:51)

(51) 東京には23の特別区がありますが、千代田区はその一つです。 (小出 1984)

(52) 朝ごはんは食べましたが、昼ごはんはまだ食べていません。 (小出 1984)

(53) 太郎は眠りについたが、空を飛んでいる夢をみた。

(48) (49) (50)の下線部の文間にはそれぞれ、Violated expectation, Result, Explanationが成立している。また、(51)では「一般—具体」の関係が認められ、(52)では「対照」の関係が認められる。さらに、(53)では「写像—貫性の原則」に従って因果的でない出来事の継起が言語化されている。なお「一般—具体」および「対照」という一貫性関係は、Kehler (2002, 2004)のResemblance relationの下位分類であり、因果的でない出来事の継起はContiguity relationの下位分類である。このように接続助詞の「が」によって結合される文の連鎖の一貫性関係は多様である。

文章の指南書である清水(1959)と本多(2005)は接続助詞の「が」についてそれぞれ(54) (55)のように述べている。

- (54) 眼の前の様子も自分の気持ちも、これを、分析したり、また、分析された諸要素間に具体的関係を設定したりせずに、ただ眼に入るもの、心に浮かぶものを便利な「が」で繋いで行けば、それなりに滑らかな表現が生まれるもので、無規定的直接性の本質であるチグハグも曖昧も表面に出ずに、いかにも筋道の通っているような文章が書けるものである。なまじ、一步踏み込んで、分析をやったり、「のに」や「ので」という関係を発見乃至設定しようとなると、苦しみが増すばかりで、シドロモドロになることが多い。踏み込まない方が文章が楽に書ける。それだけに、「が」の誘惑は常に私たちから離れないのである。(清水 1959: 56-57)
- (55) [接続助詞]の「が」を使われたとき困るのは、読者がここで思考の流れを一瞬乱されるからなのだ。「が」ときたら、それでは次は逆接かな、と深層心理で思ったりするが、それはあとまで読まないといけない。それだけ文章はわかりにくくなる。(本多 2005: 255)

清水は「私は、文章の勉強は、この重宝な『が』を警戒するところから始まるものと信じている」とも述べており、接続助詞の「が」の乱用は控えるべきとする見解を有している。本多は清水の見解に賛意を表し(55)のように述べている。(54)から分かるように、接続助詞の「が」の使用は書き手に労力を節約させる。一方(55)から何うことができるように、読み手の解釈上の負担を増大させる。清水と本多の接続助詞の「が」の使用に対する批判的な見解は、文間の意味関係が聞き手の論理に従った形で明示されることを好む日本語母語話者の直感を反映しているといえる。

2.2 主節の省略

日本語では文脈から復元可能な要素等、言語化しなくても聞き手が理解可能な要素は省略されることが多く、省略される要素も多岐にわたる(益岡・田窪(1992: 170), Maynard(2009: 45-46)を参照)。(56) - (58)に示す主題の省略の場合は、省略された要素の復元が唯一的に可能である。

- (56) 鯨は魚ではない。(鯨は)哺乳類だ。(益岡・田窪 1992: 170)
- (57) 彼女は私の方を見た。(彼女は)私を哀れんでいた。(益岡・田窪 1992: 170)
- (58) 甲：君、あの本読んだ。
乙：うん、(僕は)読んだ。(益岡・田窪 1992: 170)

これに対して(59)のように、従属節だけを述べて主節を省略している場合には、必ずしも省略された主節の復元が唯一的に可能なわけではない。

- (59) 田中ですけど(山田くんはいますか)。(益岡・田窪 1992: 172)
- (60) A: 田中酒店ですけど。
B₁: 今日は特に注文するものがないんです。すみません。

話し手の論理と聞き手の論理は日本語にどのように反映されているのか（海寶）

B₂: 瓶ビール1ケースとサイダーを1ダースお願いします。

(61) A: 田中ですけど。

B: すいませんが、返済の方、もう少しだけ待っていただけませんか。

A: いやー、今日は金を返してもらいに来たんじゃないんですよ。いい儲け話があったんで、山田さんに是非と思って伺ったんです。

(62) A: 田中ですけど。

B: どうしたんですか。こんな時間に。

(60) の場合、「田中酒店ですけど」に後続する主節として「御用聞きに伺いました」（陳述）、「何ご注文はございますか」（質問）、「ちょっと出てきていただけませんか」（要請）等様々な表現が復元可能である。つまり、話し手がどのような発話行為を遂行しているのかの判断が聞き手に委ねられている。また、主節として復元可能な表現が一つでないため、(61B) のように話し手の意図とは違った表現を復元することや、(62B) が示すように、話し手の意図を復元できない場合もある。(61B) は (61A) の従属節に後続する主節として「お貸ししたお金、返してもらえませんか」のような表現を復元しており、(62B) は (62A) の従属節に後続する主節の見当をつけることができず、省略部分についての情報を求めている。

(59) - (62) に生起しているような、従属節だけを述べて主節を省略している表現の省略部分の解釈は、聞き手に委ねられている。つまり、この種の表現は、話し手の側からみてことばの使い方が儉約的であり、話し手の論理を反映している。樋口・大橋 (2004: 131) は、「英語でも主節の省略 [はあるが、] 日本語ではより広範囲かつ頻繁に行われるように思われる」と述べている。板谷 (2006: 98-102) も日英語の婉曲表現の違いを説明する中で、日本語では (64a, b) のような従属節だけを述べて主節を省略した表現がよく用いられることを指摘している。

(63) 英語の婉曲表現は、丁寧にはっきりと言葉で表現するのに対して、日本語の婉曲表現は、丁寧でありたいと願う気持ちから、はっきりと全てを言葉で表現するのではなく、文末を省略したり、また、暗示したりして、断定を避けようとする。（板谷 2006: 102）

(64) [パーティーに招待された場面での発話]

a. ちょっと都合が悪いので……

b. 今度の土曜日はちょっと海外出張なので……

(板谷 2006: 98-99)

英語では日本語ほど頻繁に従属節だけを述べて主節を省略した表現が用いられないことは、日英語の著書等の原文と翻訳の対照からも伺うことができる。

(65) 友達が高校時代に通っていて、とてもよかったと言っていた予備校に立ち寄る。

「あの一、4月からここでお世話になりたいんですが」

「少々、お待ちください」と言って、受付の女性が奥へ消える。パンフレットでも持ってきてくれるのかな、などと考えていたが、とんでもない誤りだった。

「当校には、エレベーターや車椅子用のトイレなどの設備が整っていないため、お受け入れすることはできません」
(乙武洋匡『五体不満足』)

- (66) I dropped by [a cram school] which I'd heard was very good, according to a friend who went there during senior high school.

"Uh, I'd like to come here from next April."

"One moment, please." The receptionist disappeared into the back office. I assumed she'd gone to get me a brochure, but I was dead wrong.

When she returned, she said politely, "The school doesn't have full facilities for wheelchair users, such as elevators and accessible toilets, and so it's not possible to accept you."
(H. Ototake, *No One's Perfect*)

- (67) Takenaka: Have I told you about our risk-management plan?

Lim: I don't think so. (『NHK テレビ英語ビジネスワールド』2001年8月)

- (68) 竹中：われわれのリスク・マネジメント・プランについて、お話ししたでしょうか。

リム：していただいてないと思いますが。

(『NHK テレビ英語ビジネスワールド』2001年8月)

原書の(65)では下線部で主節の省略がみられるが、(66)の英訳版では対応する部分において主節の省略はみられない。同様に、(67)と(68)の下線部が示すように、英語では主節の省略が行われていないのに対して、対応する日本語では主節の省略が行われている。

従属節だけを述べて主節を省略した表現を用いると、主節が生起している完全な文を用いた場合に比べて話し手の意図や主張が曖昧になる。話し手の意図や主張が曖昧な言語表現を処理する際、聞き手は多義語の意味を特定する場合と同様に、コンテキストを参照しながらそれらを特定しなければならないので、意図や主張が明確に述べられている表現を処理する場合に比べて、聞き手の負担が大きくなる。つまり、話し手の意図や主張が曖昧な言語表現は、聞き手に負担を強いる話し手の論理に従った表現といえる。本節で考察した従属節だけを述べて主節を省略した表現も、複数の表現の復元可能性をもつ省略部分の解釈を、聞き手に委ねているので、聞き手に負担の大きい話し手の論理を反映した表現とみなすことができる。

おわりに

本稿では、話し手の論理と聞き手の論理が日本語の言語表現にどのように反映されているのかを考察した。日本語には文間の意味関係を聞き手の論理に従った形で明示しなければならない傾向がある一方、接続表現や文末表現が不要な場合もある。日本語では接続表現が義務的なのはどのような場合なのか、という問いに対して、Cause-Effect relationが成立している文の連鎖においては、原則として(23a-c)のいずれかに該当する場合と回答した。また、連体節の後置は、英語の外置構文とは異なり、命題間にCause-Effect relationが成立していても適格性が低

いことを示し、命題間の意味関係の明示化に関して、日本語は英語よりも義務性が強いことを示すさらなる根拠とした。さらに、接続助詞「が」によって結合されている文の連鎖と従属節だけを述べて主節を省略した表現には、話し手の論理が反映されていることを示した。

注

* 本稿は、2010年4月3日に立命館大学国際言語文化研究所ヴァナキュラー文化研究会言語学ワークショップにおいて口頭発表した内容の一部に加筆、修正を施したものである。発表に際して有益なご質問やご助言をくださった方々に心より感謝申し上げたい。また、本稿の内容に関してメールにて貴重なコメントをくださった五十嵐海理先生にも感謝の意を表したい。

- 1) 滝沢・滝沢 (2009: 72-75) は、教師が突然「テストをする」と言った状況で、日米の学生がテストをやつて欲しくないかのように述べるのかということに関する調査を行った。調査の結果は次の表の通りである。なお有効回答数は日本人が49人、米国人が88人である。

	日本女子大学生	米国女子大学生
反対表現のみ	65.4	38.8
反対表現+提案や依頼	16.3	44.9
提案や依頼のみ	16.3	14.3
沈黙	2.0	2.0

(単位%)

この調査結果について滝沢・滝沢は、「日本人学生は、教師は反対の理由を察してくれるはずという前提で「言葉数が少ないのに対して、」アメリカ人学生は、言葉で細かく反対の根拠を述べていく傾向を示した」と述べている。

- 2) 出典が明記されていない英語の用例の適格性の判断は、カナダ人英語母語話者によるものである。
3) 図書からの引用中の下線は筆者によるものである。
4) Kehler (2002, 2004) は、Hume (1740) の観念を連合させる原理を応用して、一貫性を Cause-Effect relation, Resemblance, Contiguity の3つに大きく分類している。文間に Resemblance や Contiguity が成立している場合の接続表現や文末表現の義務性に関しては稿を改めて論じたい。
5) 海寶 (2004) を参照。
6) 荒木・安井編 (1992: 1128) は「外置構文は提示文として解釈されなければならない」という見解を示している。提示文の述部に生起するのは存在もしくは出現の意味を表す動詞なので、この見解は、「外置構文の述部は存在もしくは出現の意味を表さなければならない」という原則に等しい。

参考文献

- 荒木一雄・安井稔編. 1992. 『現代英文法辞典』三省堂、東京。
Grice, H. Paul. 1975. "Logic and Conversation," *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*, Peter Cole and Jerry Morgan eds, 41-58. Academic Press, New York.
樋口・大橋 2004. 「節を越えて：思考を紡ぐ情報構造」大堀壽夫編. 『認知コミュニケーション論』大修館書店、東京。
Hinds, John. 1986. 『Situation vs. Person Focus 日本語らしさと英語らしさと』くろしお出版、東京。
Hinds, John. 1987. "Reader Versus Writer Responsibility: A New Typology," Conner, U. and R.B. Kaplan, eds. *Writing across Languages: Analysis of L2 Text*, p.p.141-152. Addison-Wesley, Reading, MA.
本多勝一. 2005. 『新装版日本語の作文技術』講談社、東京。
板谷絢子. 2006. 『A Contrastive Study of Japanese and English 日本語教師・英語教師のための日本語と英

- 語の対照研究』若草書房、東京。
- 海寶康臣. 2004. 「因果関係と言語表現」『日本語用論学会第7回（2004年度）大会予稿集』73-80. 日本語用論学会.
- 海寶康臣. 2005. 「因果関係と言語表現—主語名詞句からの外置の場合—」『語用論研究』7. 63-74. 日本語用論学会.
- Kehler, Andrew. 2002. *Coherence, Reference, and the Theory of Grammar*. Stanford: CSLI Publications.
- Kehler, Andrew. 2004. "Discourse Coherence." In Horn, L.R., and G. Ward eds. *The Handbook of Pragmatics*, 241-265. Blackwell, Oxford.
- 小出慶一. 1984. 「接続助詞ガの機能について」『アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター紀要』7. 30-43. アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター.
- 兎玉徳美 1998. 『言語理論と言語論 - ことばに埋め込まれているもの - 』くろしお出版、東京.
- 兎玉徳美 2002. 『意味論の対象と方法』くろしお出版、東京.
- 兎玉徳美 2004. 『意味分析の新展開 - ことばのひろがりに応える - 』開拓社、東京.
- 兎玉徳美 2006. 『ヒト・ことば・社会』開拓社、東京.
- 益岡隆志・田窪行則. 1992. 『基礎日本語文法 - 改訂版 - 』くろしお出版、東京.
- 牧野成一. 1978. 『ことばと空間』東海大学出版会、神奈川.
- Maynard, Senko. 2009. *An Introduction to Japanese Grammar and Communication Strategies*. The Japan Times. Tokyo.
- Miyake, Misuzu. 2007. *Contrastive Rhetoric in Japanese and English Writing: Reflections on the History of Contrastive Rhetoric Studies, the Japanese Written Language, and its Educational System*. ふくろう出版、岡山.
- 邑本俊亮. 1998. 『文章理解についての認知心理学的研究 - 記憶と要約に関する実験と理解過程のモデル化 - 』風間書房、東京.
- 中島平三. 1995. 「主語からの外置 - 統語論と語用論の棲み分け - 」高見健一（編）『日英語の右方移動構文 - その構造と機能 - 』17-35. ひつじ書房、東京.
- Rochemont, Michael. and Peter. Culicover. 1990. *English Focus Constructions and the Theory of Grammar*. Cambridge University Press, Cambridge.
- 清水幾太郎. 1959. 『論文の書き方』岩波書店、東京.
- 高見健一. 1995. 『機能的構文論による日英語比較 - 受身文、後置文の分析 - 』くろしお出版、東京.
- 滝沢謙三・滝沢カレン・アン. 2009. 『英語コミュニケーション力 - 暗黙のルール 22』三一書房、東京.
- 内田聖二. 2002. 「高次表意からみた日英語比較への一視点」『人間文化研究科年報』17, 7-18. 奈良女子大学.
- 渡辺学. 1995. 「ケレドモ類とシカシ類」宮島達夫・仁田義雄編『日本語る意義表現の文法（下）連文・複文』くろしお出版、東京.
- 山本英一. 2002. 『「順序づけ」と「なぞり」の意味論・語用論』関西大学出版部、大阪.
- Zipf, George. K. 1949. *Human Behavior and the Principle of Least Effort: An Introduction to Human Ecology*. Addison Wesley Press, Cambridge, Massachusetts.